

第4章

教訓を伝承し続けるために



教訓を次世代へ
～まちあるき語り部と語り部バス

祈りと教訓の伝承の場
～震災復興祈念公園と南三陸311メモリアル

教訓を次世代へ ～まちあるき語り部と語り部バス

震災の後、被災地ではさまざまな語り部活動が行われてきた。
南三陸町では発災から2カ月後の5月、いち早く「語り部」による伝承活動がスタートした。
観光協会は団体向けガイドツアー「語り部による学びのプログラム」を。
民間のホテルは「語り部バス」を。
活動は今や、震災当時まだ中高生だった若い世代も参加して続けられている。
大津波の記憶も、いつかは薄れ、未曾有の大災害も
「風化」という言葉の中に埋もれてしまうかもしれない。
「もう誰にも、自分たちと同じような悲しい思いをしてほしくない」
語り部たちの思いは一つだ。

旧防災対策庁舎の説明をする語り部ガイド

忘れてはいけない津波の惨禍 記憶と記録を伝承するために

東日本大震災の大津波によって甚大な被害を受けた市町村では、震災の後、多彩な伝承活動や語り部活動が行われている。

東日本大震災だけではない。三陸沿岸の市町村は、明治三陸大津波（明治29年6月15日）、昭和三陸大津波（昭和8年3月3日）、そしてチリ地震津波（昭和35年5月24日）と、幾度も大津波に襲われてきた。そう



南三陸町観光協会の菅原きえさん

した過去の惨禍は教訓として伝えられてきた。

南三陸町では、5.5mの波高となって押し寄せ41名もの犠牲者を出したチリ地震津波が、町の津波災害対策を進める出発点となった。高さ6mほどの防潮堤整備はこの経験を踏まえたものである。また、平成22(2010)年度までは、チリ地震津波が発生した5月24日を防災訓練の実施日と定めていた。

町は、津波の過去を忘れてはいなかった。しかし、東日本大震災で押し寄せた津波はチリ地震津波の3倍もの高さだった。誰もが「まさか」と思った。油断をしていたわけではない。想定を遥かに超えた津波が襲ってきたのだ。

東日本大震災の大津波の記憶も、いつかは薄れ、未曾有の大災害も風化という言葉の中に埋もれてしまうかもしれない。もう二度と同じ悲しみを繰り返さないため、そして未来

を生きる子孫たちのためにも、この記憶と記録はしっかりと伝えていかなければならない。

南三陸町では、発災から2カ月後の平成23(2011)年5月、震災を語り継ぐ活動がスタートした。

ガイドたちの生の声が 津波のリアルを語り、伝える

「発災から2カ月後の5月、『語り部』による伝承活動がスタートしました。立ち上げは『ガイドサークル汐風』という、観光協会が震災前から観光ガイドをお願いしていたメンバー10名ほどの方々に協力をいただきました」と、南三陸町観光協会の菅原きえさんが、その始まりを振り返る。

観光ガイドは、平成20(2008)年に実施したディスティネーションキャンペーンを契機に実施された「ふるさと観光講座」によるガイド育成講

習を経て認定を受けた方々だった。

「関西から来てくれたボランティア団体が阪神淡路大震災の経験から『震災の経験を伝えていく必要が後々出てくる。今からそういった活動を始めてはどうか』と提案してくださいました。その必要性は理解できたものの、全く復旧の目途が立っていない町の状況を前に、果たして地域の理解・協力は得られるのか。関係スタッフが思い悩む中、相談を持ち掛けたのが『ガイドサークル汐風』でした。メンバーの皆さんは、さまざまな思いがありながらも、ガイドの経験があるからこそできる活動で復興を後押ししていこうと立ち上がったくださいました。そこからはもう一度ガイドとしてのスキルアップや災害の正しい情報を確認する等、研修会を重ね、5月末に開催された『南三陸復興市』で語り部活動がスタートしました」

発災から2カ月後に語り部活動が始まったこと。これは被災地でも異例の早さだった。

この頃になると町にはマスコミや工事関係者だけではなく、ボランティア活動に参加しつつも「被災地の現状を知りたい」というニーズが増えていった。さらに、「買って応援」「食べて応援」という被災地を支援する言葉も語られ始めると、復興シンボルイベントと銘打った「南三陸



被災したまちを見下ろしながら説明

復興市」への集客も増えていき、発災から4カ月後の第4回復興市の来場者は1万8,000人にも及んだ。

「語り部による学びのプログラム」を開始

平成23(2011)年6月、観光協会では震災前からご縁のあった旅行会社の協力を得て、来訪団体向けに「語り部による学びのプログラム」を開始した。プログラムは「震災講話」と「バス車窓案内」の2つである。

「震災講話」は、語り部が参加者に東日本大震災の体験談や教訓、これまでの復興の道のりなどを話す座学スタイル。「バス車窓案内」は、語り部がバスに乗って震災当時の浸水エリアを案内する。両方を受講するこ

とも、どちらか一方だけを受講することも可能とした。

さらに平成27(2015)年からは、個人や少人数のグループでもプログラムを体験できるように、新しいプログラムとして「まちあるき語り部」をスタートさせた。

「まちあるき語り部」では、参加者にガイドが同行し、町内を見て回りながら、町の被害状況や復興の現状を案内する。最少催行人数は1名。語り部1人につき最大5名まで参加できる。

現在も、復興事業の進展状況に合わせて、あるいは参加者の意見や感想を取り入れて、常にその内容をブラッシュアップさせながら、次世代に繋ぐ伝承活動として取り組んでいる。



自身の体験談と震災からの教訓を伝える



写真を交えながら当日の様子を解説

第4章 教訓を伝承し続けるために



震災当時、中高生だった若手も被災体験を語る

「震災遺構・復興祈念公園コース」は、さんさん商店街から震災復興祈念公園内へ歩き、震災遺構である旧防災対策庁舎も案内する。

「津波の高さを実感するコース」は、数箇所のポイントに立ち寄り、現在地の高さや町を襲った津波の平均的波高、指定避難場所の高さなどを知ることができる。

「南三陸311メモリアル・復興祈念公園コース」は、令和4(2022)年10月1日にオープンした南三陸町東日本大震災伝承館・南三陸311メモリアルと南三陸町震災復興祈念公園を訪れる。

「町民たちが自分自身の体験を受講者に丁寧に伝えます。受講者からも『対話するように詳しい話を聞くことができる』と好評をいただいています」

菅原さんは「自然災害というものを考えてほしい」と強調する。そして、仮に自分自身が「その時」に居合わせたらどうすべきなのかを想像してほしいと言う。

「私たちの経験が全てではありません。でも、もしも自然災害に遭遇するようなことがあったらどうするのか、どんな行動を取れば良いのか、考え続けることが自分自身の命を守るにつながります。自分だけは大丈夫だなんて過信することなく、考え続けてほしい。語り部は、そ

のきっかけなのです」

「まちあるき語り部」には、震災当時まだ中学生や高校生だった世代のガイドもいる。発災直後、彼らはどんな役割を担ったのか。復興の槌音が響くまちで何を感じていたか。大人たちからどんな希望を託され、どんな未来を思い描いていたのか。現代の中高校生や若い世代に、同世代からの視点で震災を語り伝えていく。

「震災を風化させないために」 南三陸ホテル観洋の取り組み

町最大の宿泊施設である「南三陸ホテル観洋(以下:ホテル観洋)」は2階まで津波が押し寄せせるなどの被害があったものの、震災直後から避難者の受け入れを開始。最大時には町民600名の他に医療、ライフライン工事関係者等を含め約1,000名がここで避難生活を送った。

8月末に仮設住宅が完成し始め、避難所としての役割が一段落し始めた頃、ホテル観洋では独自の活動として「語り部バス」という被災地ガイドを開始した。

発災1カ月後の4月には、町に団体で訪れてきた人たちのバスにホテル観洋のスタッフが同乗して道案内をするという「乗車案内」もすでに始め

られていたが、ホテル観洋の女将である阿部憲子さんは、1つ気付いたことがあった。

「野原みたいになったまちを見て『ここはもともと更地だったのですか?』という質問をされる方もいらっしゃいました。震災のことをお話しすると同時に、南三陸の以前のこともお伝えしなければ、まちにあった暮らしの風景が無かったことになってしまうかもしれない。そう感じたので、津波の爪あとがまだ残っているうちに活動を始めたのです」

(阿部さん)

語り部バスの正式名称は『震災を風化させないための語り部バス』という。

「語り部バス」を体験したくて まちを訪ねる宿泊客も

ある時、町を訪れた復興大臣が語り部バスを体験した。乗車する前に大臣は「もう分かってます。乗らなくても大丈夫」と言ったが、関係者に勧められて語り部バスで地域を一巡りすると「印象が大きく変わった」と語った。

「やはり報道の映像とはまるで違う。住民の皆さんの思いにも触れることができた。世界中の人に、この被災地の現状を見て、知ってほしい」(大臣)



「震災を風化させないための語り部バス」の車内

「地元の方と触れ合ったり、語り合うこともされました。現地の空気感というのでしょうか。生の声、リアルな思いに触れられて、ご自身も感じられることが多かったのではないかと」(阿部さん)

語り部バスはホテル利用者に限らず希望者を対象としたツアーだ。参加した人がそれぞれの地元へ帰り、クチコミで語ってくれることも多く、語り部バスに乗ることを目当てにやってくる宿泊客も増えたという。

対応するのはホテルのスタッフ9名で、自社所有のバスを使う。団体客など人数が多い場合は地元の語り部にも積極的に関わってもらっている。ある年のゴールデンウィークにはバス8台を運行したこともあった。

ルートは固定しているわけではない。主なコースの一例としては、朝8時45分にホテルを出発し、戸倉地区、高野会館前、旧防災対策庁舎を巡って9時45分ごろに帰着する約60分のコースがある。

ガイドたちは、戸倉小学校跡地では「マニュアルでは校庭に一次避難することになっていましたが、それは省略して児童91名は直接高台へ避難したため無事でした」と話し、津波の到達高の痕跡が残る高野会館では「スタッフの判断で372



南三陸ホテル観洋のロビーに避難して震災翌日を迎えた人々

人の方と犬2匹が助かりました」といったエピソードを語る。

「皆さんそれぞれでしょうけれど『来る前とはイメージが変わった』と話される方が多いです。当ホテルでは修学旅行の生徒さんたちも受け入れています。震災以来1,300校以上が南三陸を訪ねて来られました。平成23(2011)年に開始して以来、延べ45万人以上の方をご案内してきました」(阿部さん)

ガイドたちの願いは一つ 「災害への備えを忘れないで」

平成29(2017)年9月、ホテル観洋の「震災を風化させないための語り部バスによる地域交流活性化への取り組み」は、公益社団法人日本観光振興協会、一般社団法人日本旅行業協会(JATA)、日本政府観光局(JNTO)等が主催する「第3回ジャパン・ツーリズム・アワード」で大賞を受賞した。東日本大震災直後から宿泊施設を被災者に提供するなど地域に寄り添い、復興の道を開き、同時に語り部バスを運行して震災体験を利用者に伝えることで防災意識の向上を図り、震災を風化させないためのたゆまぬ取り組みが高く評価されたことが受賞

の理由だ。

「被災者、被災地は、あの日のことを忘れていません。あれからの日々のごとも、これからの備えも伝えていかなければいけないと考えています。同時に、町にお越しいただけることで、みんなは元気になります」

町内には個人として、あるいは語り部サークルとして震災の体験や町の移り変わりなどについて話を聞かせてくれる人々もいる。語り部たちの思いは一つ。「自分たちと同じような悲しい思いをしてほしくない」ということだ。

これからもまちは変わり続ける。メディアの情報だけではなく、自分の足で現地に赴き、語りの中に浮かぶ思いや願いをリアルに感じながら、防災・減災への意識を高めていきたい。



「第3回ジャパン・ツーリズム・アワード」の授賞式

第4章 教訓を伝承し続けるために

祈りと教訓の伝承の場 ～震災復興祈念公園と南三陸311メモリアル

「追悼・継承・感謝、そして未来を想像する協働の場」
南三陸町震災復興祈念公園。
被災者たちの体験を知り、防災を自分ごととして考え、語り合う場、
南三陸町震災伝承施設 311 メモリアル。
祈りを続け、教訓を伝承する2つの場に、
新たにうみべの広場に2体のモアイ像が加わり、
復興の未来を見守る。
南三陸町の未来を見つめる。

南三陸町震災復興祈念公園

町民たちの関心が高かった 震災復興祈念公園の整備

令和5(2023)年7月29日。八幡川の河口に近い左岸の高台で、新たな公園「うみべの広場」のオープニングセレモニーが始まりの時を待っていた。

南三陸町の復興のシンボルでもある2体の「モアイ像」が真夏の陽の光にきらめく志津川湾を背に立ち、「さんさん商店街」をはじめとするまちを見守っている。

うみべの広場からさんさん商店街を経て南三陸産の杉材を使った太鼓橋「中橋」を八幡川右岸へ渡ると、東日本大震災の犠牲者に祈りを捧げる場として整備された「南三陸町震災復興祈念公園（以下：震災復興祈念公園）」がある。

町は、平成23(2011)年12月に策定された「南三陸町震災復興計画（以下：復興計画）」に基づき、新

たな商店街を核とする産業ゾーン、住宅地を高台に造成・移転する居住（高台）ゾーン、震災復興祈念公園等の祈りの場となる公園ゾーンの整備を進めてきた。

「高台移転は、復興の一丁目一番地でした。そして、祈りの場をつくることも、まちの使命の一つ。鎮魂や復興の象徴として防災文化を育む祈りの場という位置付けです」

計画当時から震災復興祈念公園の整備に携わってきた南三陸町役場の遠藤和美さんはそう話す。

「平成24(2012)年9月、住民たちで組織した志津川地区まちづくり協議会の中に、高台、産業、公園の3つの部会ができました。他の部会と同様に、公園の関心も高いものがありました。」（遠藤さん）

追悼、鎮魂、伝承、象徴…。 公園計画に求められたもの

公園部会での協議の内容は次のようなものだった。

平成24年3月と7月、町は復興計画に基づいて先に挙げた3つの大きなゾーンングを実施。11月21日、ここまでの流れと見直し案などについて話し合う公園部会のワークショップが行われた。

「当初の案では24haの広さを考えていましたが、国や県との協議では『面積を拡大にすると町が負担する維持管理費も膨大になる』と懸念する意見も出されました。それを踏まえて11月の部会では『公園計画に求められるものは何か？』を改めて話し合い、その結果、追悼・鎮魂・伝承・象徴をコンセプトとした公園として計画の見直しと変更が協議されました」（遠藤さん）

平成25(2013)年1月16日には、

前回のワークショップで導き出されたコンセプトを検討。「海浜親水空間がほしい」「防災や避難施設も必要」「震災の痕跡や遺構を残したジオパークに」「花畑やお花見ができる場所の整備も」といった意見や要望も出され、話し合いが進められていった。

「遊具や鎮魂の鐘がほしい」といった意見も出されました。平成26(2014)年からは、公園のデザインを手掛けられた奈良女子大学の宮城俊作先生や、事業を受託する独立行政法人都市再生機構（UR）も加わり、平成27(2015)年の町づくり協議会・輝くみらいづくり部会で基本設計案を検討。その後、町民説明会で提示し、さらに意見交換を実施して可能な限り意見や要望を取りまとめました」（遠藤さん）

祈りの場を未来へとつなぐ

平成28(2016)年6月には「都市計画事業認可」を取得して実施設計方針が決められ、9月から10月にかけて行われた町民向け説明会で、町は震災復興祈念公園のテーマを公表した。

新たなまちは、かつての志津川を中心市街地の上に、気の遠くなるような造成作業によって嵩上げされた海拔約10mの地盤の上に整備されている。住民たちはそのことを忘れずに、現在ここにある暮らしを誇りある未来へとつないでいく。

震災復興祈念公園ゾーンの広さは約6haと決定。平成28年12月に着工し、3年後の令和元(2019)年12月に「祈りの丘」「復興祈念のテラス」を含む一部エリアが開園。令和2(2020)年3月には「みらいの森」「語り継ぎの広場」などが開園して、10月に全体が完成した。

さんさん商店街から中橋を渡り、旧市街地の地図レリーフやベンチが置かれた「記憶の広場」を通して、海拔約20mの高さに整備された築山「祈りの丘」へ。頂上には震災で犠牲になった住民たちの名簿を納める「名簿安置のモニュメント」が設置された。

「祈りの丘ができたことで、思いが形になりました」と遠藤さん。

丘は二段重ねとなっていて、頂上から一段低い部分の周囲には志津川地区を襲った津波の平均高16.5mと同じ「高さのみち」が巡る。

丘から下って「復興祈念のテラス」と「語り継ぎの広場」を過ぎ、「祈念の軸」上の道をたどると、震

災前のまちの高さである海拔1mの地点に、震災遺構「南三陸町防災対策庁舎」が残されている。振り返ると「祈りの丘」が見える。そこが津波の高さだと思うと、恐ろしさが実感できる。

南側には町の木であるタブノキなど70本余りの木々が植えられた「みらいの森」が整備された。森は犠牲者への鎮魂とともに、復興へと向かう人と自然のレジリエンス（復元）の力を、樹木の成長とそれを支える人々の協働によって表現し、まちの未来像に重ね合わせている。

きっとここには、「忘れないという文化」がつくられていくだろう。

震災復興祈念公園のテーマ

追悼・継承・感謝 そして 未来を想像する協働の場

東日本大震災およびこれまでの自然災害による犠牲者を悼み（追悼）、震災の記憶と教訓を風化させることなく次世代に受け継ぎ（継承）、大自然への畏敬とともにその豊かな恵みを讃え（感謝）、復興をなしたげた町の未来の姿を人々とともに想い描く（想像）、

そのための場を人々の協働によって創りつづける。



志津川地区まちづくり協議会公園部会

第4章 教訓を伝承し続けるために

「悲しみを繰り返さないために」
人々の願いを伝える震災伝承施設

東日本大震災の発生から4,222日目となる令和4(2022)年10月1日。南三陸さんさん商店街、南三陸町震災復興祈念公園、道の駅南三陸などが整備された新しいまちの中心部に「南三陸町震災伝承施設 南三陸311メモリアル」が開館した。地元産の杉材をふんだんに使用して建てられた建物は、令和元(2019)年開場の国立競技場を設計した隈研吾建築都市設計事務所の手によるもの。「海と山、過去と未来を繋ぐ船」をイメージしてランドデザインを描いたという。

各地で、東日本大震災の地震と津波の惨禍の記憶と教訓を未来へ伝え残していくために伝承施設が開設されている。他の多くの伝承施設では、ガレキの中から回収された被災品の実物や被災の現場をとらえた写真パネル、映像などを展示して、被害の状況と被災時の人々の行動、復興の足取りなどを紹介する内容と

なっている。

しかし「南三陸311メモリアル」の展示は、他の施設とは少し違っている。

「南三陸311メモリアル」の大きな特徴は、町の住民たちがあの日体験した厳しく悲しい現実を知り、自然災害の恐ろしさや理不尽さと向き合う「ラーニングプログラム」にある。

ラーニングとは「学ぶ」こと。学び、身に付け、記憶する。震災や大津波など、誰も体験はしなかった。しかし、起きてしまった現実を知ることでは学び、考え、繰り返さないために備えることができる。

ラーニングシアターは施設の奥にある。そこに行くためには、暗く静かな展示ギャラリーを通らなければならない。ギャラリーには、住民たちの証言をもとに東日本大震災のエピソードをまとめたパネルや映像、震災遺物資料が展示されている。その先に、ひととき暗い空間「アートゾーン」がある。

そこにあるのは、積み上げられた無数の錆びた金属の箱。フランスの現代美術家クリスチャン・ボルタンスキーのインスタレーション

『MEMORIAL』だ。

ボルタンスキーは、歴史や記憶や人間の存在、生と死、命の尊厳などをテーマに作品を生み出し続けた世界的なアーティストである。暗い水底のような空間に、浮かぶように、あるいは沈んだように居並ぶ錆びた箱の群れ。これは何か？ なぜこんなに箱がたくさん積み上げられているのか？ 箱の中には何が入っているのか？ 静かに、しかし圧倒的に迫り来る違和感の中で、誰もがその「意味」を考える。

いのちを想う小さな旅で
それぞれが答えを探し続ける

アートゾーンに続いてラーニングシアターへ。シアターでは『生死を分けた避難』『そのとき命が守られるか』の2本の映像が上映されていて、近々3本目が追加される予定だ。

映像は、平成23(2011)年3月11日の星空の再現で始まる。町中の電気が消えて真っ暗になっていた雪晴れの夜空を満天の星々が埋め尽くしたことは、多くの人が覚えている。

「あの日あったこと」「失われた命のこと」を来場者に想わせながら、ラーニングプログラムが静かに始まる。

映像では、住民たちがあの日の体験を語る。

必死に逃げたこと。目の前で誰かが津波に飲み込まれたこと。自分も全身ずぶぬれになったこと。流されて倒れ込んでいる人をみんなで助けたこと――。

抗い難い巨大な力を持った自然災害の記録と記憶を前に、来場者は「自分なら、自分の命を守るためにどんな行動をするだろう？」と考え始める。

上映の合間には、南三陸311メモリアルの特徴であり、そして



展示ギャラリー



クリスチャン・ボルタンスキーのインスタレーション「MEMORIAL」

最も大切にしている「対話タイム」が何度か設けられる。

対話タイムは、シアターで隣に座った見知らぬ来場者同士が「この時、あなたならどうしますか？」「私ならこうするかもしれません」という考えや、意見や異見を交換・交感する時間である。

1回当たり1分ほどの対話タイム。言葉を交わすうちに、思いがけない言葉や気付かなかった視点に出合ったりしながら、誰もが、それぞれの「気付き」を得る。展示物を見るだけではない、南三陸311メモリアルだけの体験だ。

「ギャラリーからラーニングシアターまでの90分ほどの体験は『いのちを想う心の旅』なのです。ここで投げかけられる問いに正解はありません。まさに正解を出せない『モヤモヤ』をこそ持ち帰って、語り合い、問い続けていただきたいと、私たちは願っています」(「南三陸311メモリアル」パンフレットより)

気付きや思いを持ち帰り
言葉を紡いでいくきっかけの場

来場者たちは、そうした気付きをアンケートに残している。

「訪ねるごとに自分の中の違う言葉や思いと出合える」「プログラムの問い掛けに自身の判断が委ねられる。震災の教訓をただ伝えるだけに留まらない」「私ならどうするか？ 皆で話しながら自分ごととして考えられる」「防災に答えはない。だからこそ、よりリアルに考えて備えないといけないと改めて思った」「命を守ることの難しさを伝える施設だ」「プログラムは命と向き合った瞬間だった」「助けられた命、助けられなかった命…。一つ一つの特別な命、特別な体験が、逆に普遍性になって衝撃的」

館内のエントランスや「みんなの広場」では、東日本大震災と津波に関

するさまざまなデータや町の被災状況、町におけるこれまでの津波の歴史、地域住民たちの証言映像などを常設展示しているほか、写真家の浅田政志氏が平成25(2013)年から撮影し続けてきた住民たちの写真も展示されている。笑顔やユーモアを絶やすことなく地域を再生しようと力を合わせてがんばる住民たちの姿に、観覧者たちは元気をもらえる。

また、住民参加型の企画も推進している。町内から公募した震災前の町の写真や、震災前の街並みの復元模型の展示などだ。それらの企画を通じて、災禍と共に乗り越えてきた地域住民たちが思い出を語り合ったり、語り継ぐ機会を創出する場でもある。

伝承とは、言葉を見つければ未来への旅だ。

被災者たちの体験を知り、心の中にあふれた思いや言葉を持ち帰る。そして防災や減災を自分ごととして考え続け、語り合って言葉を紡いでいく。

「南三陸311メモリアル」は、その機会を提供し続ける。



南三陸町震災伝承施設南三陸311メモリアル



ラーニングシアター

葛藤し、考えることで 人は学び、そして気付く

「ラーニングプログラム」は、どのように企画され、どのように制作されたのだろうか。プログラムの制作と展示ディレクションを担当した文化事業ディレクター・演出家の吉川由美さんに話を聞いた。

吉川さんは仙台市在住。文化芸術を核にしながらコミュニティや地域資源、観光、教育、医療、福祉などをつなぎ、地域に活力と新たな価値を創り出す活動を国内各地で進めている。町との関わりは、震災の前年に行った「南三陸みんなのきりこプロジェクト」がきっかけだった。

「南三陸町から南三陸311メモリアルの企画について相談を受ける前から、『震災伝承施設はどういう形であるべきか』についてずっと考えていました。それまでも、全国各地にある自然災害や戦争の惨禍などを

伝える施設も訪ねていたのですが、いつも感じていたことは、どこの伝承施設も時間の経過とともに関心が薄れ、入場者が減少するという現実でした」

伝承施設では、例えば地震の大きさや津波の波高、死者・行方不明者、倒壊家屋の数といった数値的な被害の大きさを伝える展示が多い。「でも、それだけでは自分ごとにならない。自分のこととして考えるからこそ大事。葛藤することが自分の学びになる」と吉川さんは感じていた。

記憶と体験を共有する ラーニングプログラム

東日本大震災の前から、町では「津波が来たら高台へ」を合言葉に避難訓練や防災教育を続けてきた。

しかし3月11日、訓練通りに高台へ逃げた人も多かった一方で、自宅に留まったり戻ってしまった人もい

た。安全だと思っていた高台の指定避難場所にも津波が襲来了。そこで車ごと流された人もいた。ずぶぬれの人を助けようとした人もいた。ためらう人もいた。救えたかもしれない命に何もできなかったことを悔いる人もいた。

「高台へ」という言葉だけでは、命は守られなかった。

吉川さんは、あの日の町民それぞれの経験を伝えるべきと考えた。

「南三陸町には、津波の威力を伝える展示物になるようなものは残っていませんでした。そこで、南三陸町の伝承施設で展示できるものは何だろうか考えた時、それは人々の体験しかないと思ったのです」

ラーニングプログラムの映像では、あの日あの時の住民たちの思いや、とっさの判断や振る舞い、行動などを住民たちが自ら証言する。町の人たちが語る証言に、来場者たちは自分自身を重ね、戸惑い、葛藤し



ラーニングプログラムを体験する



ラーニングプログラムをプロデュースした吉川由美さん

ながら、「命を守る行動」について考え始める。

「その映像を途中で止めて、1分間の対話タイムを設けています。居合わせた隣同士で、自分ならどうするかを語り合う。葛藤が生まれる場であれば、学びや気づきはあります」

しかし、このプランを提案すると、町は懸念したという。「来館者が話し合おうとするだろうか？それにたった1分で何が話せるのか」と。対話タイムは、自分とは異なる他者の考えや思いに触れ、新しい発見をするきっかけを作り出し、言葉を発することで自分ごととして考えることを促す。

「あの日、志津川高校の下にあった高齢者施設に生徒たちが救助活動に駆け下りました。津波がまたその場所を襲うかもしれないタイミングでした。当時の高校生があの日を振り返り、後悔はしていないが、教師になった今、教えるには同じことは絶対にさせないと語ります。そこ

に葛藤がある。『自分ならどうするだろう？』と迷い、考えることこそが、とても大切です」

大切な人を失った悲しみは決して色あせることはない。

「でも、記憶も体験も、やがては風化していきます。だからこそ、自分ごととして災害について考える体験を通して伝えることが大切なのです」と吉川さん。

「12年が過ぎた今ならやっと話せる、話してもいい、という人も現れてきました。体験が違えば視点も違う。南三陸311メモリアルは、住民の皆さんの生々しい時間や感情を体験できる施設にしたかったのです」

過去から未来へ記憶を結ぶ 「きりこ」というアート

吉川さんが大切にしてきたものに「アートの力」がある。

吉川さんが町と関わるきっかけと

なった平成22(2010)年度の「南三陸みんなのきりこプロジェクト」は、町が企画した女性による観光のまちづくりの取り組みの一つだった。

「キリコ」とは、神職が半紙を切り透かして作る正月の神棚飾りだ。旧仙台藩の塩釜以北の神社に広まっていた文化で、南三陸町の家々では今も神棚に飾られる。このプロジェクトでは、まちの人たちの宝物や思い出などを絵柄にし、その様子を真似て切り紙にし、通りに面した軒先に飾った。

作られた「きりこ」の数は650点。「きりこ」が風に揺れる夏の町並みを記憶している人は多い。震災後、このプロジェクトのことを知った日本経済新聞神戸支局の記者は「阪神淡路大震災後の神戸はもう、記憶の中にある神戸じゃなくなった。でも南三陸の『きりこ』は町の記憶を伝える大切なプロジェクト。ぜひ続けてください」と言ったという。



震災の前年の平成22年夏、志津川地区中心部の沿道に650枚の「みんなのきりこ」が飾られた。



平成24年夏、建物が流失した跡地にきりこボードを設置

第4章 教訓を伝承し続けるために



仮設商店街の各店舗のため制作した「みんなのきりこ」



平成28年、公営住宅の集会所で一人ひとりの人生のエピソードを聞き取って絵柄にし「みんなのきりこ」を制作する活動を始めた。



平成28年、完成した「みんなのきりこ」を皆さんに贈呈。



夏が近付くと、南三陸ポータルセンターできりこづくりが行われた。

「震災の翌年の夏に、きりこを看板のようにかつての家々の跡に立てたのですが、それを見て、町の人々は、自分の記憶が消えていく早さに驚いたと言います。町の風景が跡形もなく消え、震災以前の町を知らない人には住民が失くした『もの』と『こと』を想像できなかった。『きりこ』ボードを見た人は今は見えなくなった町と人々の存在を感じてくださったと思います。」

アートには見えないものを見せる力がある。館内のアートゾーンにインスタレーションを制作したクリスチャン・ボルタンスキーは、震災直後に東北を訪れていた。作品制作を依頼しに行ったとき、彼は「もうイメージはできている」と言った。

「彼の作品の、あの違和感。逆説的に人間の尊厳を問う圧迫的な空間です。ユダヤ人でもある彼は普遍的な課題として人間の命の尊厳を問い続けました。震災の問題だけに矮小化せず、人間にとって生きるとはどういうことかを問い続ける。そんな施設であるためのアート空間です」

利他の心と土地の文化が復興の底力となった

館内の「みんなの広場」には、写真家の浅田政志氏が平成25（2013）年から平成28（2016）年にかけて撮影した町民たちの写真が展示されている。その中に、戸倉地区の37人の漁師たちが笑顔をいっぱいにはこぼさせている作品がある。

「カキ養殖でのASC国際認証の取得を日本で初めて成し遂げた戸倉地区の漁師たちです。震災前は、海の環境悪化を知りながら、私利私欲に任せてカキの密殖を続けてきた彼ら。しかし、震災ですべてを失った時に彼らは決断したのです。地域の海の豊かな環境を未来につなぐために、養殖イカダの数を劇的に減らそうと。そのためには、全員が震災前の養殖の権利を一斉に放棄しなければならませんでした。震災前の収益が得られるかどうか全くわからない中で、彼らはチャレンジしたのです。結果的に海の環境は回復し、震災前以上の収益が全員にもたらされるようになりました。何もかも失っても、漁師さんたちは仲間や地域を思いやる利他の

心を失うことはなかった。これは、地域社会の分母としての文化の力だったのではないかと感じています」

吉川さんは、町の人々の根底には「土地の文化がある」と話す。

戸倉地区には「鹿踊り」の源流のひとつとされる伝統芸能「行山流水」の戸辺鹿子踊りも伝承されている。その踊りには、かつて狩猟の対象とした鹿だけでなく、人々の命を養ってくれた生きとし生けるものに感謝する心がメッセージとして込められている。

「震災は、自然と命への畏敬の念とともに、地域の人たちの中に互いに支え合う利他の心を改めて発動させました。新たなチャレンジに人々を向かわせ、復興の底力となったものは、みんなの胸奥に眠っていた土地の文化の力です」

文化とは、人々の生き方そのものであり社会の分子ではない。社会を支える土台こそ文化なのだ。

「浅田さんの写真は、実は一番辛かったころのものです。皆さんは今、写真の中に困難を乗り越えようと互いに支え合った仲間たちの姿や、がんばった自分自身の姿を改めて発見し、誇りに思っているはず。



南三陸311メモリアル開館後、写真家・浅田政志氏と撮影に参加した町民たちが当時のエピソードを語り合った。

そんな時空を超えた体験をもたらすのがアートの力です。皆さんの文化に寄り添って、アートプロジェクトをやって来てよかった」と、吉川さんは笑う。

「がんばったじゃないか」という記憶と事実を残し、伝える

アートの力は、人々の心を支えた。

震災のあった年の秋冬、町内にある5つの小学校では、各校ごとに自分たちの震災後の一年間を振り返りながら歌をつくった。吉川さんが企画したアートプロジェクトだ。

子どもたちの中には、震災後、トラウマに苦しむ児童もいたという。子どもたちに辛い気持ちと向き合わせること、という声もあった。吉川さんは、友達や家族、地域の人たちと共に震災からの日々を乗り越えてきたことにフォーカスしながら、その毎日の中で感じた小さな幸せやみんなでがんばったことを自分自身の言葉で表現してもらって歌詞にし、ゲームを通して子どもたちと音楽家が旋律を共同制作した。完成した曲を平成24（2012）年3月の「東日本大震災犠牲者南三陸町追悼式」で、町の人たちの前で歌い上げた。

組曲のように発表された5つの小学校の子どもたち135名の歌声に、参列者も、照明や音響スタッフも、

涙を抑えることはできなかった。ある学校では、この後子どもたちの心の状態が大きく回復したという。

「自分はよくがんばれたと前向きに1年を振り返り、記憶の引き出しを整理して、しまい直したのです。自分たちが作った歌をその後も歌い続けたある学校では、歌詞の中に自分自身の体験が登場することを、子どもたちは心から喜び、誇りに思っているようでした。」

子どもたちが、あの日からどう命に向き合いながら生きてきたのか？ということも南三陸311メモリアルが伝えたいテーマの一つだ。

「被災地では多くの音楽イベントが行われました。音楽にはすばらしい癒やしの力がありますが、とすると被災者を単なる「聞き手」にしてしま

うこともあります。被災者が主体となったクリエイティブな活動を行うことが、大きな災害の後には絶対に必要なことです」

チャレンジ精神、利他の心、土地の文化、記憶を結ぶ「きりこ」、自身の存在を確かめる写真、子どもたちのアクション…。地域に根差したアート活動は、町の人々の生きる力を呼び覚まし、増幅させた。

「森里海ひと いのちめぐるまち」が南三陸町のビジョンだ。「いのちめぐるとは？」を知る旅、「いのちを想う旅」を人々は求めていると吉川さんは言う。

「南三陸町を、そういう旅ができるまちにしよう。アートは人を「想い人」にさせる。文化はこれからの町をつくる大切な要素だと、私は思っています」



浅田氏とともに、作品を見ながら、被災後を乗り越えてきた日々を懐かしく振り返った。

第4章 教訓を伝承し続けるために



佐藤仁町長

ルイス・バルマ駐日チリ大使館
臨時代理大使

南三陸高校の佐藤華那さん

「マナ」の力に見守られながら
町は未来への創造を続ける

「うみべの広場」で志津川湾を背に
並んで立つ2体の「モアイ像」は、向
かって右側が初代、左側が二代目で
ある。

初代の像は、昭和35年5月24日に
志津川町に押し寄せたチリ地震津波
から30年後の平成3(1991)年、志
津川町がチリ人の彫刻家に依頼し、
チリで作った像だ。震災で流失した
が、ガレキの中から頭部だけが発見
され、志津川高校(現・南三陸高校)
に展示されていた。

左側の二代目像は、東日本大震災
後の平成25(2013)年、チリ共和国
政府から南三陸町へ贈られた。仮設
商店街の時と本設になってからのさ
んさん商店街で公開されていたが、こ
の日、モアイ像たちもここに移転して
本設の日を迎えた。

モアイ像は、チリ共和国の西方沖に
浮かび世界遺産登録地でもあるイー
スター島で作られた、人面を模したと
される石像だ。アブと呼ばれる島の

高台に、やはり海に背を向けて立っ
ている。

モアイ像の瞳には「マナ」(霊力)
があるという。イースター島の人々が
イースター島の石を使って自ら彫り、
最後に瞳をはめ込んだとき、初めて
マナが宿る。

海外に贈ることについて現地では
反対の声もあったが、当時91歳の彫
刻家である長老が「日本はいつだっ
て我々を助けてくれた。人々が再びそ
こで生きていきたいと思えるような
マナを与え、我々も復興を助けようで
はないか」と語ると、誰もが了解した
という。瞳には復興という未来を見
つめるマナが宿された。

うみべの広場のオープニングセレ
モニーで佐藤仁町長は、「震災以降、
何度もテープカットを行ってきたが、
今回のオープニングセレモニーでの
テープカットによって、12年半かか
った南三陸町の復興事業がすべて終了
したことになる。感慨深い」とスピー
チ。

また、臨席したルイス・バルマ駐
日チリ大使館臨時代理大使は、南三

陸高校の生徒がモアイで町を盛り上
げようとした取り組みなどに触れて、
「60年以上の歴史がある南三陸町と
チリの歴史にとって新たな一歩とな
る。うみべの広場とモアイ像を皆さん
とともに大事にしながら、この広場で
楽しんでもらいたい」と語った。

そして、令和4(2022)年末に発生
したイースター島の火災によって被害
を受けたモアイの復旧作業のために
と募金活動を行った南三陸高校から
は佐藤華那さんが代表として登壇し、
「モアイ像は南三陸町にとってかけが
えのない存在です。町の成長と、チリ
共和国との友好の架け橋として、いつ
までも見守っていてほしい」と願いを
訴えた。

志津川町の発展を見つめてきた初
代。そしてマナの力で南三陸町の未
来を見守り続けていく二代目。並び
立つ2体のモアイ像の頭上に、ハトを
模した真っ白な風船が放たれた。

羽ばたこうとする心にこそ、夢と創
造の力は宿る。南三陸町の人たちは、
いつだって青い空と海との間に未来
の地図を描いていく。



モアイ像の除幕式



モアイ像(初代)



チリ共和国から贈られたモアイ像

レポート

震災を知らない世代が 震災を「自分ごと」として考える ～志津川中学校1年生の「南三陸311メモリアル」体験

東日本大震災から13年が過ぎた。

震災後に誕生した子どもたちが、これから中学生になる。

震災を体験していない世代に、震災の何を、どのように伝えるのか。

その教訓を、いかに「自分ごと」として捉えさせるのか。

そのための場として、

「南三陸町震災伝承施設 南三陸311メモリアル」のラーニングプログラムが活かされている。

町立志津川中学校1年生の「総合的な学習の時間」を訪ねてみた。

中学生たちが学ぶ いのちの大切さと守る行動の難しさ

令和5（2023）年6月30日、南三陸町立志津川中学校の1年生たち42人（男子20、女子22）が、「総合的な学習の時間」の校外学習として震災伝承施設「南三陸311メモリアル」を訪ねた。

中学校の「総合的な学習の時間」は、「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成すること」を目指している。

この日の学習テーマは、「町のことについて考える」だった。

生徒たちのほとんどは東日本大震災が発生した時はまだ1歳になっておらず、震災を記憶していない。しかし、復興によって町が絶えず姿を変え続けていた様子を目にしながら、彼らは成長してきた。

ふるさとに目まぐるしい変化の時代をもたらした、その原点は「津波」だ。

前ページの記事「祈りと教訓の伝承の場」で紹介したように、南三陸311メモリアルでは自分自身のことと

して自然災害について学び合う「ラーニングプログラム」を提供している。町の学校はこれを授業に取り入れて活用している。ラーニングプログラムを体験して、彼らは何を感じるのだろうか。その授業に同行した。

生徒たちは展示ギャラリーと、クリスチャン・ボルタンスキーの作品が設置されているアートゾーンを通してラーニングシアターに入った。シアターの壁3面は大型スクリーンで、それぞれ異なる場面を映し出す。椅子はランダムな向きに並べられていて、生徒たちは各々自由に選んで腰掛けた。



スタッフが、表裏を黄色と青色に分けて印刷されたカード型のパンフレット「防災ミニブック」を配った。プログラムの中で問い掛けられる「YES/NO」に対して、自分の回答をその色で表明するのだ。

星空のシーンからプログラムが始まった。この日上映されたのはProgram2『そのとき命が守れるか』だった。町の指定避難場所が津波に襲われ、思ってもいなかった事態に遭遇した町民たちの証言映像から、命を守る行動の難しさを自身に当てはめて考えていく。



「避難訓練に参加していますか？」という問いに、ミニブックを掲げて答える。

「避難所が使えなくなったらどうしますか?」「次の安全な場所へ向かうときに問題になりそうなことは?」という質問の答えは、ミニブックに書き込む。1分間の対話タイムでは、隣席の友人やグループで話し合い、考えや意見を交換し合った。

改めて思い知らされる津波の猛威の映像に圧倒され、生死を分けた体験者の証言に感じ入りながら、生徒たちは懸命に自分の言葉を探していた。

「この日の体験はそれぞれが家に持ち帰り、家族や友人と話し合ったりしながら、自身の中でかみ砕いてくること。そして、翌週の振り返りの授業で互いに発表し、もう一度、考えをまとめること」が先生から告げられて、この日は解散した。



【ラーニングプログラムを体験した生徒たちの感想】



さの せせき
佐野 希汐くん

「昨年も見たのですが、改めて津波は怖いと感じました。友だちとは、避難訓練などにも積極的に参加しようと話し合いました。また、すぐ持ち出せるバッグを用意するなど、備えもしっかりしておきたいと思います」



あべ るな
阿部 琉雪さん

「今日で2回目の体験ですが、今回は冒頭で女性の方が話している場面で涙が出てしまいました。また、南三陸町の自然の大きさも知りました。ここで生きている人がいる、ということを誰かに伝えたいです」



あべ るな
阿部 永人くん

「僕も2度目の鑑賞です。被災した人たちの思いなどがよく分かりました。友だちとは避難ルートの確認は大事だねと話していました。津波の怖さを伝えたい。誰もが安全な場所を見つけて逃げてほしいと思います」



さとう りのあ
佐藤 里愛さん

「以前見たときは違う内容でしたが、どちらも伝わりやすいと感じました。津波はやっぱり恐ろしい。予想以上の大きさもあり得る。もしも逃げるときは、まず自分の安全確保を優先して、その上でできることをやりたい」



わたなべ みはる
渡邊 心晴さん

「私は初めて見ましたが、とても伝わりやすく、登場する皆さんのコメントがとても強く胸に響きました。特に『自分の命がなければ誰かの命も助けられない』という言葉が印象的で、自分の命を守りたいと感じました」



さとう ひな
佐藤 ひなさん

「2回目です。小学生の時には気付かなかったけれど、やっぱり周りの人たちとの協力が大事だと思いました。また、例えば波に流されても諦めないで生きようと思うことは大切だし、カッコいいってこういうことだと感じました」

大事なことは 知ることと伝えていくこと

7月4日、1校時。「振り返りの授業」。
1年生42人が、南三陸311メモリアルでのメモを記した「ミニブック」を手に、教室前のピロティに集まった。

南三陸311メモリアルでの気付きを単発の体験で終わらせてしまうのではなく、子どもたちは時間をかけて考え、学ぶ。学校という場所が避難所となることもある。皆が助け合うためには共有しておくべき事柄も多い。子どもたちにできることもたくさんある。考え続けていくこと。それ自体が防災アクションだ。

ミニブックに記していたメモをもとに話し合う。

避難場所が使えなくなった時、次はどこへ行くか。その時に気を付けるべきことは？

「いったん低地へ下るときは津波の第二波に気を付ける」「道が崩れているかもしれない」「山では熊等の野生動物に会うかもしれない」

日頃から気を付けておくべきことは？
「防災マップを確認しておく」「食料を用意」「非常持ち出しリュックの中身を確かめ、時々入れ替える」

防災時には海辺にいるかもしれない。「南三陸町はすぐに津波が来る」「避難優先。とにかく逃げる」「親にもそのように聞かされてきた」

テーマを出して話し合い、発言する。気付きは、町のこれからにも、彼らの未来にも繋がっていく。

「この授業の大きなテーマは『地域の特徴や良さを知って、その保全を考える』です」

先生が生徒に話し掛ける。
「各自で課題を設定して調べましょう。何をどうやって調べるのか、自分で考えてください。自分は何を知りたいのか？ 海のこと？ 山のこと？ 歴史？ 環境？ 地域の良さって何？ 保全とはどういうことか？ 『森里海連

環学』とは何か？ …途中でテーマが変わっても構いません。自分自身で深めていきましょう」

「大事なことは、知ることと伝えることです」

人が生まれて初めて吸い込んだ空気は、その心のいちばん奥底にとどまり、陰に陽に、その生涯に影響を与え続けるという。

彼らが生まれたこのまちには、大きな空と森と海がある。森里海ひとのつながりの輪の中に生きてきた人々の長い歴史がある。災害から幾度も立ち上がってきた強さと誇りがある。彼らはそれを知った。次の世代にも伝え、未来へと繋いでいくだろう。

まちと、人の歩みは続く。ここは「森里海ひとのちめぐるまち」なのだ。



メッセージ「私の描く未来」

【1年1組】



【1年2組】

